ご注文の勇者ですか？

首謀Ｓ・Ｒ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ご注文の勇者ですか？

【Ｎコード】
Ｎ６２２７ＣＶ

【作者名】
首謀Ｓ・Ｒ！

【あらすじ】
異次元世界を舞台に勇者をリースする妖精たちの話です。嘘です。適当に書きました。

（前書き）

妖精に要請する話

異世界からの勇者を吟味し、
ご注文どおりにリアルタイムでお届けいたします。

どれだけ強大な魔王が来ても、
どれほど困難な軍団が攻めてきても
カウンターフォースとして最適な人材を
ジャストインタイムで戦線投入

ご用命は、第7フェアリー世界　異次元ゲート管理係まで

貴方の国を、未来を、確実にお守りします！

――――

「これをどう思う」

王様は朝起きて早々に枕元に異次元ゲートを通って投げ込まれた便箋を開封して一通り読むと、天蓋つきの大きなマイベッドの傍らに立ちお世話役の侍女数名をせわしく監督していた相談役の爺や「ダラル」に向かって手紙を渡した。

「ほう、これは渡りに船でございますな」

手紙を一通り読んだダラルは、立ち上がって執務服に着替えている王様に向かってこう返した。

「…早速手配してくれ。あの『魔王』にいつまでも暴れられては、おちおち眠ってられぬわ」

「御衣にございます」

ダラルはそう言うと、半裸でベランダに出て日課のポージングをし始めたマッチョの王様を残し、城内の戦略区画にある魔道士たちの集まる研究塔に向かった。

２０分後

「まいどありがとでございますｗ」

城の謁見の間に集まった魔導師たちの手によって召喚された「妖精」が、地面に置かれた2枚目の便箋に書かれていた「魔方陣」の中から元気よく飛び出してきた。

「どんな魔王でも速攻イチコロ！魔王は1匹見たら３０匹は来ます！そうなる前にあなたの大切な国を守るため、第7フェアリー世界、異次元ゲート召喚係『ポルト』、召喚に応えてただいま参上！」

羽を入れても身長３０センチ程度の大きさの身体を中空に漂わせながら、小さな妖精は広い謁見の間全てに響くような大声で自己紹介をした。

「いやー、今回のお客様はあなたですね。今後ともよろしぅおねがいします」

「ああ」

突然のことで動けない周囲をよそ目にポルトは玉座の上に座っていた王を目ざとく見つけ出すと、腰の鞄に入れていた名刺を取り出して王様に向かって差し出した。

「無礼じゃぞ小娘」

「いや、よい」

王様はダラルを制止すると、ポルトの名刺を受け取った

「いやー、美しい肉体の多さまですねぇ、しかも心の広い対応。このポルト、貴方のような王様に召喚されてほんと、運がいいとしかいいようありません」

地面に降りて深々と礼をするポルト

「よくぞ異世界から参られた、小さな客人よ。この私『ゼヒナル』からの依頼を受けてもらえぬか？」

「勇者の召喚契約ですね？承知いたしました」

ポルトはその体勢のまま顔だけを上げて王様に向けると、先ほど名

詞を出した鞄からＡ４サイズの契約書と羽ペンを取り出した。
「では『魔王を殺す』契約を始めましょうか」
ポルトは小さくニヤリと笑うと、契約書を王様に渡した。

「３日前より魔王と名乗る者が南方の地よりこの国に来た。奴はこの城に飛んでくるなりこの私に力比べを挑んできた」
謁見の間の玉座の横の壁にある扉を抜けると、王様たちが普段使う『作戦会議室』があった。
２０ｍはある巨大な長テーブルにいくつもの豪勢な椅子が左右１０脚づづ並んでいる。
だが掃除が大変だということで、ポルトと王様はその横に置いてある小さな机で作戦を立てていた。
「私は自慢の肉体で迎え撃った。そう、この…」上着を脱ぐ王様「鍛え抜かれた美しい肉体でな！」
「…で、結果は」
ダブルバイセップスからサイドチェストに移りつつある王様に向かい、ポルトは事務的に聞く。
「見ての通り…今回は私の負けだった」
「負け？…失礼ですが王様、魔王という人物への報復として勇者を使われるおつもりですか？」
「…いや」
上着を着て長椅子にどっしりと腰を下ろすと、王様はテーブルの上に広げられた地図を指差した
「ここが我がゼヒナル城だ。そして」指をそのまま南方にずらす「ここが魔王の城だ」
隣じゃねーか！というツッコミを飲み込むと、ポルトは話を続ける。
「資料の通り、魔王のタイプは肉体攻撃型、魔法は肉体強化のみでよろしいですね？」
「ああそうだ。奴はこの城に来て私を倒してから周辺の村々に出没しては攻撃を繰り返している。アジトが城に近いこともあり、国民

がおびえていることも考えると、このまま放置というわけには行かぬ」

天に向かってガッツポーズをとる王様

お前、魔王に負けたんだろう…という言葉を飲み込むと、ポルトは契約書を机上に置いた。

「契約内容を確認します。パワー型魔王1匹。最終目的は駆逐。よろしいですね？」

「ああ、早急に頼みたい」

「了承いたしました。では、魔王駆逐のための勇者を選定して3日以内に送ります。契約書を読んでサインをしていただいた時点で契約は締結。報酬の半分は前払いでお願いします」

王様は机上に置かれた契約書をまじまじと見ると、サインを書き込んだ。

「契約ありがとうございます。では、勇者を送ります」

ポルトは契約書と報酬の半分を受け取って鞄の中に放り込むと、「勇者取扱説明書」という本を王に渡した。

「必ず目を通しておいてくださいね」

空中に魔法陣を出現させると、ポルトは魔方陣に入り込み、王様の前から姿を消した。

2日後　謁見の間

「おおお、われらの呼びかけに応えし異世界の伝説の勇者よ」

棒読みに近い感じの声で、王様は目の前に召喚されたばかりの「異世界の勇者」に向かってこう言った。

「我が国がききにびん…ひんしておる、中で、そなたの力を是非借りたいのだ」

玉座から立ち上がりながら、王様は勇者に向かって両手を伸ばした。

（最初が肝心じゃ。妖精からもらった本にも書いてあったからな。

久々に頭を使ったから寝不足で仕方ないが、これで我が国から舞おうが消えるなら安い買い物じゃ）

「どうしたのじゃ勇者よ。王の願いを聞き届けてくれぬか？」

正装し杖を掲たダラルが、謁見の間の中央にかかれた魔法陣の中心に出現した勇者に近づいていく。

そのダラルの気配に気付いたのか、勇者はゆっくりと立ち上がって王様のほうに向き…

「ウホッ」っと一声鳴いた。

「ゴリラじゃねーか！！！！！！！」

ダラルは全力で突っ込みを入れた。

パワーに全ステータスを振った毛むくじゃらの種族が送られてきたと思っていたら、その姿はこの世界にも居る「ゴリラ」そっくりであった。

いや、どう見てもただのゴリラだ。

「これが勇者か？」

一同があっけに取られていると突然、謁見の間の天窓が破られて羽を広げた魔王が降りてきた。

「ぐはははははははははっ！異常な次元振を感知してきたら、貴様！勇者だな！」

王様と勇者の間に降りた魔王が、召喚ホヤホヤのゴリラに向かって指をさす。

「貴様…強いな！」

「グホッ、グホッ、グホホホホホホッ！」

魔王の声と殺気に反応したのか、異世界のゴリラ…いや勇者は立ち上がると、魔王に向かって両手を差し出した。

「この我に挑むか！その心意気よし！」

両手をがっつり組むと、１匹と１人は力比べを始めた。

魔力と気力と野性の力が２匹の中心からあふれ出して周囲に強風を

発生させる。
「なんだあのゴリラ。ただのゴリラじゃないのか！？」
荒れ狂う力の本流が、広い謁見の間においてあるあらゆるものをフッ飛ばし引っ掻き回す。
「王様、避難を」
「いや、私はここでいい。他の者たちを避難させよ」
王はダラルにそう命令すると、自分は玉座から2匹の戦いを見守り続けた。

２０分後

「間違いない！フォーゴ！貴様だな」
「ウホッ、ウホッ」
一通り力比べを終えると、魔王と勇者ゴリラは謁見の間の中央で抱き合って再会を喜んでいた。
事態が飲み込めずに腕を組んだまま玉座の前に立っている王様に気付くと、魔王はゴリラと一緒に王様のほうに向き直って頭を下げた。
「ご迷惑をおかけしました」
頭を上げた魔王の、うれしそうで少し緩んだ顔を見て、戦いを前線で見守っていた緊張が解けた王様はそのまま玉座に座り込んだ。
「なんなんだ、いったい…」
魔王を見上げる王様
「…ワシらは力の差を感知する感覚が優れてるのと引き換えに、異種族の顔を見分けられないんですわ。ご無礼ながら力比べによって確認させてもらってたんですわ」
（そういえば、周囲の村が襲われていたという報告はあったが、被害の報告はなかったな…）
「こうして無事に大切な家族でもあるフォーゴに出会えました。あとは借りていた古城の家主さんにお礼言ったら帰りますわ。行くぞ

フォーゴ」
「ウホッ、ウホッ」
魔王とゴリラは背中に羽を生やすと、謁見の間の天窓をぶち破って外に出て行った。
あっけに取られる王様の上に向かって、ステンドグラスの破片が降りそそぐ。

大穴の開いた天窓を見ながら王様は言った
「とりあえず…寝るか…」
勇者を送り出す役目を終えた王様は、寝室に向かうとそのまま爆睡した。

同じ頃
第7世界フェアリー世界の妖精待機所にて

「ポルトォ~、この前あんたが間違って異次元の穴に落とした『有羽ゴリラ』、返してきてくれた?」
ポルトと同じ姿をした妖精が、昼食を取っているポルトに向かって聞いてくる。
「ああーあれね?返したよ」
ポルトはそう言うと、鞄の中に数十枚の金貨を指先で触りながら数えた
「もう、あんな凶暴なゴリラを間違って異次元移動させないでよ。飼い主が見つかって良かったけど、行った先の世界であのゴリラが「力比べしまくったら困るでしょ?」しかもしゃべるし…」
「はいはい、気をつけまーす」
どんぶりの中にある最後の一口をスプーンですくって食べると、からになった容器を持ってポルトは席を立った。
その際、鞄の中から1枚の紙が落ちた。
紙には魔王の姿がかかれており、そこにはこう書かれていた。

「探し人：通訳できる珍しいマッチョゴリラです。間違って異次元転送された可能性があるので、各自見つけ次第『飼い主のフォーゴ』さんに連絡をお願いします」

（後書き）

妖精に要請した話でした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6227cv/

ご注文の勇者ですか？

2015年8月23日20時22分発行